

現代のレズビアン・コミックス、新聞コミックス、21世紀の女性たちによるアメリカン・コミックス

溝口 彰子

現代アメリカで「レズビアン・コミックス」と言えば、レズビアンのコミックス作家による、レズビアンを主な登場人物とした作品群を示すことが当然の前提とされているのは、本展のトリナ・ロビンスの解説からも伝わってくる。一方日本では、「レズビアンマンガ／コミックス」を語るにあたって、まず、「レズビアン的」な作品群、つまり、女子高校生同士の、友情と呼ぶには緊密すぎる関係性を描いた少女マンガ作品や、女性同士の過激な性描写を中心に据えたポルノグラフィックな一部のレディースコミックス作品などをどう位置づけるかを検討すること、さらには「百合」という名称の出自や意味範囲の変化などに触れることから始めなくてはならないだろう。アメリカと同様の定義で「レズビアンマンガ／コミックス」と呼べる日本の作品は天宮沙江による『プリカちゃん』くらいだろうか。

もちろん、作家本人がレズビアン当事者だから優れたレズビアンマンガ／コミックスが創作できるというわけではないし、そもそも、誰が「レズビアン」なのか、という問題は一筋縄ではいかない。複数のクィア理論家が示してきたように、セクシュアリティとは本人にとっても明確に定義できるべくもない、無意識の領域を内包するものだからだ。…だが同時に、自分自身のセクシュアリティについて完全には知り得ない人が、現実社会において「レズビアン」というラベルのもとに生きることを決意し、その決意ゆえに異性愛者としての人生とは異なる問題に遭遇し、抑圧を受けることもまた事実だ。「レズビアン」というカテゴリーは決して自明のものではなく問題化されるべきであると同時に、現実的に「レズビアン」というカテゴリーがどう機能しているのか検証することは、一見矛盾しているようでいて、どちらも必要不可欠な営みなのだ。

本展では3人のレズビアン・コミックス作家が紹介されている。まず、昨今ではレズビアン&ゲイ・コミックスのアンソロジー『みずみずしい母親』(Juicy Mother)の編纂でも知られるジェニファー・キャンバー。本展で展示されている「メイ・リンのすべて」のエピソードでは、6歳から43歳まで、女性とのみ恋愛する娘に対して、両親は「一時の気の迷いだから、大人になったら異性愛者になるはず」と思っている、というケースが描かれている。男とつがわれない限りはいくつになろうとも「未熟な子供」扱いされるのは日本だけではないようだ。なお、キャンバーはSF設定の作品も発表しており、中でも「サブガールズ(Subgirls)」シリーズは、NYの地下鉄構内に生息するXメン並みの超能力を持つ3人のレズビアン・スーパーヒロインをめぐるユニークなシリーズだ。

1980年にハワード・クルーズによって創刊された『ゲイ・コミックス』(Gay Comix)は1991年にアンディ・マンゲルスが編集長になって以来、掲載する作家の男女比をほぼ半々にする方針がとられたが、同誌で取り上げられたレズビアン作家のなかでもとくに有名なのが『目が離せない

レズビアンたち』シリーズのアリソン・ベクデルだ。1983年にNYの女性新聞で発表を開始して以来、現在でも続くこのシリーズは、発表開始から2年足らずでアメリカ各地のレズビアン&ゲイ媒体にベクデル自らが配信を手がけるという、当時としては画期的な手法でレズビアン・コミュニティを中心に読者を獲得。1986年からはファイアブランド・ブックスから単行本が出版されている。ベクデルは自伝的グラフィック・ノベル作品『ファン・ホーム』がタイム誌で2006年の「ベストブック」に選ばれるなど、今やメインストリームで高く評価される作家となったが、『目が離せないレズビアンたち』シリーズも継続している。(なお、原題は”Dykes to Watch Out For”。ここでの「Dyke(ダイク)」は、もともとは男性的でごついレズビアンへの蔑称だったが、近年ではレズビアン当事者が、あえて誇りをもって自称として用いる言葉となっている)本展で紹介されている「古い二重基準」では、表向きはレズビアンである娘を受け入れているかのような家族が、その実、異性愛者の家族や親戚とはどれだけ違う扱いをしているかが語られている。娘婿の保険会社での校正の仕事について、熱心に質問をあげせる家族たちが、娘の女性パートナーが南極単独探検を果たしたと聞いてもあからさまに無視する…男女のカップルが居間のソファでいちゃいちゃしていても微笑まじげに黙認する両親が、女性カップルが手を握っただけで「子供の目の前だぞ!」と叱責する…といったエピソードは、どれもありそうなものばかりだ。また、このシリーズでは女性カップルが人工授精サービスを利用して子供を持つ過程が詳しく描かれ、ヒスパニック系アメリカ人であるパートナーが生んだ「息子」をもう一人の母親が郊外の公園で遊ばせていたら、彼女がアフリカ系アメリカ人であるというだけで通りすがりの「公園ママ」から「あなた、新入りのナニーね。どちらのお家の?」と質問されて激怒する様子なども描かれており、アメリカ社会における人種問題への意識も高い。

さて、ベクデルが一般アメリカ社会で生きる等身大のレズビアンたちを描いているとすれば、ダイアン・ディマッサが描く「短気なパイザン」は、レズビアンのみならずすべての女性が、おそらく一生のうちに何度かは抱く、ある種の傲慢な男性へ対するいらつきと、「こいつ、殺してやる」というような一瞬の過激な妄想を代弁し、ことごとく実行に移すキャラクターだ。「殺人するレズビアン・テロリスト(Homicidal Lesbian Terrorist)」というサブタイトルの通り、ガールフレンドと公園のベンチでくつろいでいたところに割り込んできた無礼な男の脚を斧で切り落とし、「これが問題だっていうんだよ!」と意気揚々と宣言し、他のエピソードでは銃で気に入らない男を蜂の巣にするのも朝飯前、何ら罪の意識などない。それがパイザンだ。……もちろん、パイザンは作者ディマッサの現実を反映してい

るわけではなく、妄想を体現しているのだ。敵は「男性特権」。(「男性」ではなく「男性特権」であることに注意)

アメリカのコミックスと聞くと、新聞の最終面近くに掲載されている「コミック・ストリップス(comic strips)」(ストリップは細長い一片、の意)と呼ばれる新聞コミックスが思い浮かぶ人も多いだろう。全米の複数の新聞にシンジケートを介して配信されている作家のうち、女性はごく少ない。本展で紹介しているのはそのうち2例だが、正確に言えば、1つめは「6人の娘たち」というタイトルで、6人の女性作家たちが日替わりで作品を提供していく一種の「ワークシェアリング」方式だ(日曜日の担当は持ち回り)。イザベラ・バナマン、マーガレット・シュロック、リーナ・ピッコロ、アン・テルニーズ、カスリン・ルミュエ、そしてステファニー・パイロの6人で始められ、現在ではルミュエにかわってベニー・エプスタインが参加している。本展で紹介されているパイロの作品も含め、6人の作家とも、女性を主人公としている。

サンドラ・ベル・ランディはカナダ在住。大学のキャンパス新聞からキャリアをスタートさせ、1994年以降はキング・フィーチャーズを通して世界130紙以上にその作品が配信されている。『友達同士』は3人の40歳の女友達を主人公に、その世代の等身大の女性たちの喜びや苦悩を描くシリーズ。本展のためにロビンスが選んだ図版では、男性が描くコミックスの中の女性像についての異議申し立て、軽視とあきらめ、そして次世代への(悪)影響の恐れが4コマで効率よく描かれている。

21世紀の現在、アメリカのコミックス界ではかつてないほど多数の女性作家が活躍している。そのなかでロビンスが本展のために選んだのは2点。英語で「蠅」「飛ぶ」の意味の単語と同じスペルの名前を持つフライは、本展で紹介している「幼い頃彼女はコミックスに夢中だった」でも見て取れるように、実験的なスタイルのコミックス作家だ。時間の経過による行動の展開や、同一の瞬間での母親に向けた「いい子」の顔と、母親の言いつけなど聞かずにコミックス漬けになってやるという確信的な「悪い子」の内面の両方などを連続体として描き出している。ま

た、画面構成も、コミックス的でもなく、かといって、日本の少女マンガ的でもない、独特のものとなっている。

もう1点、アン・ティモンズの「ゴーガール!」は、マンガのスタイルに触発されたとのことだが、背景の樹木や植物、バイクのスピード感を表現する流線的な動線、そして二人の少女をきらきらと囲む星といったあたりには少女マンガ的な表現が見て取れる。なお、ティモンズはロビンスとコンビを組んだシリーズも展開している(ティモンズが作画、ロビンスがスクリーン担当)。

日本の女性マンガとアメリカの女性コミックスの関係は、今後も深まっていくのではないだろうか。最近の動きとしては、2004年頃から日本の「ボーイズラブ(BL)」マンガの英語版が北米市場でコンスタントに発売されるようになってきている。人気作家の単行本でも部数は7-8,000部と、日本に比べると非常に小さな市場規模だが、愛好家によるコンベンションイベント「ヤオイ・コン」は2009年で9回目を迎えるなど、根強い人気を誇っている。また、日本の百合マンガやアニメを愛好する人々による「ユリ・コン」や百合マンガレーベルも存在する。とはいえ、日本のBLや百合マンガに影響を受けた～真似た～女性コミックスが今後アメリカで増えるだろう、といった直線的な影響／被影響関係とはならないような気はする。その予感の一例として、今年のヤオイ・コンにも参加していた台湾出身のコミックス作家／イラストレーター、ジョー・チェンをあげよう。高校卒業までを台湾で、日本の少女マンガ漬けで過ごしたという彼女は、その後アメリカ合衆国に渡りマーヴルなど大手出版社で活躍している。アメリカ市場にあわせて作画スタイルを変える必要があったと語る彼女が現在描く美青年像は、日本の一部のBL愛好家が、「この人がBLを描いてくれたらすごいのに〜!」、今までにない絵柄だけど、きっと受け入れられるよね、と熱望する対象となっているのだ。マンガとコミックスが才能あるアーティストを通して有機的にグローバルに実を結ぶ時、新たな表現が生まれるのかもしれない。

